

ヒア・カムズ・ザ・サン

ケープ・カナベラルの夜風は晩秋だというのに生ぬるく、だけど不快感は感じられなかった。レジーナはフォンの灯りをたよりに適当な礎石を見つけると砂をはらって、海のほうを向いて腰をかけた。ぼくもおなじようにすわった。

ここ数十年の気候変動とメタンコントロールで、このあたりの海岸線はすっかり変わってしまっている。いま、ぼくが腰掛けているのも、かつてフォン・ブラウンの時代に使用していた歴史的ななにかなのかもしれない。

カバンのなかから冷え切ったキューバサンドを取り出すと、ぼくはセブンアップで流しこんだ。隣でレジーナもなにかを食べているようだが、暗くてよくわからない。

フォンを消すと、あたりは星明かりだけになった。暗がりにだんだん目が慣れてくる。南天には冬の星座が宝石のように輝き、地平すれすれにはヤシの木の高いだから、エリダヌス座の一等星アケルナルがちらりと顔をのぞかせている。オリオンの足もとあたりの空

を眺めながら、「エリダニ40」とレジーナがつぶやいた。

「ああ、あのあたりかな？」とぼくもいって、その方角を見上げた。「エリダヌス座、グレース先生のお手製プラネタリウムにもあったつけ。——いや、さすがにマイナーすぎるか。サンフランシスコからはアケルナルは見えないし」

「いいえ、ちゃんと載ってたわ。わたしは覚えてる。星座当てクイズでやったもの」とレジーナはいった。確信のこもった口調だった。

「よく覚えてるな」ぼくは感心した。もう二六年も前の話なのに。

彼女は中学のクラスメイトで、ぼくらはじつに二六年ぶりの再会だった。といっても、別にロマンチックな理由があるわけではない。二週間後にここケネディ宇宙センターから打ち上げられる宇宙ミッションの関係者として、出席していた会合の参加者リストのなかに、偶然、彼女の名前があったのだ。

向こうは、テニユアの赤外線天文学の教授。こっちは、つい半年前までバイオ系貧乏ラボを渡り歩いていた元ポスドク。タウメーバ特需でようやくまともなポストにありつけたばかりだ。だけど、専門分野があまりにちがうせいかな、それとも会うなりグレース先生の思い出話で盛り上がったせいかな、ふしぎとぼくらは十三歳の頃とおなじような感覚で話が

できた。

ああ、ちがうんだ。隣の席の女子のノースリーブにどきどきしてたあの頃、とかそういうやつじゃない。さすがにそんな甘酸っぱい感覚は、すっかり過去のものになってしまった。なんにだってなれる気がしてたあの頃。グレース先生が教えてくれる世界の秘密が楽しくてしうがなかったあの頃。サンフランシスコの天気予報がまともだったあの頃。

……うん、これはこれで、ロマンチックというかノスタルジックかもしれない。

「……いよいよね」彼女がいった。

「うん」ぼくは発射台のありそうなほうに目をこらしてみた。いくつか鉄塔のようなものが見えたけど、どれがそうなのかはよくわからなかった。

この浜辺から二週間後に打ち上げられるのは、宇宙船の一部だ。モジュールごとに打ち上げて、軌道上で組み立てていく。組み上がったら地球からうんと遠ざけたうえで、最後の最後にアストロファージ燃料を充填する。人類は、地上でのアストロファージの扱いにトラウマができてしまっている。とくに宇宙船絡みでは。でも、アストロファージの性質をよく知っているぼくとしては、そのくらいの慎重さがあったほうがいいんじゃないかと思う。やつら、光速の〇・九二倍の速度で移動できるっていうのは、なかなかおだよ

じゃない。

* * *

ぼくらが八年生だったとき、世界は一変した。正直、それより前がどんな世界だったのか、あまり覚えていない。

太陽が暗くなり、異常気象が拡大して、人類は食糧を充分に生産できなくなった。原因を探るうちに太陽から金星に伸びるペトロヴァ・ラインが発見され、そこに生きるアストロファージという人類史上初の地球外生命が見つかった。地球の近隣の恒星も暗くなっていること、しかしタウ・セチだけは被害を免れていることがわかった。さらにアストロファージは恐ろしく効率のいい推進剤や放射線防護材として使えることがわかり、あれよあれよというまにタウ・セチの有人探査計画、プロジェクト・ヘイル・メアリーが立ち上がった。

どういう経緯があったのかは知らないが、中学校でぼくらに科学を教えていたグレース先生が、〈ヘイル・メアリー〉の乗組員クルーに選ばれてしまった。困惑していた先生の顔を、いまでも覚えている。

ミッシェンの全貌を知った日、ぼくら生徒たちは怒りや悲しみをどこにぶつけなければいいのかわからなかった。往復二六年というのも衝撃的だったけど、クルーは片道旅行で、ビートルズという四機の無人プロップだけが地球に帰ってくるという特攻ミッシェンだったのだ。いまなら燃料や重量の問題だと頭ではわかるが、中学生のぼくらにはただの理不尽でしかなかった。非人道的ミッシェンだという感覚は、いまでもぬぐえない。だけど、当時は世界中が「有事」の状態だった。人ひとりの命よりも人類滅亡を防ぐことのほうが、往々にして優先された時代だった。

結局ぼくらとはろくに話もできないまま、グレース先生は十二光年のかたに旅立ってしまった。残されたぼくらは、先生とほかのクルーたちがなにか画期的な解決策を見つけて出して、ビートルズに乗せて戻してくれるのを待つしかなかった。

とはいえ人類も、二六年間、ただぼかんと口を開けて親鳥の帰りを待つてたわけじゃない。絶え間ない異常気象や疫病、軍事衝突に大半のリソースを割かれながらも、人類は準備を怠らなかった。ぼくらはそんな営みのなかで青年期と壮年期をすごしてきた。

実際、人類はけっこうよくやったと思う。当初は一九年で人類の半数は死ぬといわれていたけど、アストロファージの異様に高いエネルギー効率を逆に利用することで、食糧の

備蓄を予想よりもかなり増やすことができた。もつとも、一面の麦畑やトウモロコシ畑はすっかりフィクションのなかの光景になってしまった。合成オーガニックなでない農作物は、ホールフーズでも目玉が飛び出るような値札がついている。ぼくみたいな安月給はウォルマートの合
成野菜が唯一の選択肢だ。

〈ヘイル・メアリー〉 出発の一三年後には、ビートルズの帰還まで人類をなんとか持たせる目算がたち、太陽系に戻ってくるであろう四機のビートルズを確実に捕捉してやるための準備が本格化した。万が一取り逃がしてしまったら、〈ヘイル・メアリー〉のクルーの努力がおじちゃんになってしまう。

地球の公転軌道に、一二〇度の間隔で三基の赤外線観測衛星——いや、もつと正確にいうと、ペトロヴァ光観測衛星——が配置された。太陽を中心に数億キロメートルの正三角形をかたちづくる三基はそれぞれ〈リー・ジェ〉、〈オリーシャ〉、〈ライランド〉と名づけられ、タウ・セチの方向を二四時間見張りつづけた。ビートルズはおしりを太陽系側に向けて逆噴射することで減速する。その噴射光をとらえてやろうっていう算段だ。地上の深宇宙ネットワークNも、ほかのミッシェンの合間をぬって、ビートルズが電波で送ってくるであろう位置情報に忍耐強く耳をすませた。

そうしてついに、二六年目がやってきた。

最初にとらえられたのは、光点のほうだった。〈リー＝ジエ〉と〈オリーシャ〉の分光データには、はっきりとペトロヴァ光の特異なスペクトルが写っていた。〈ライランド〉がその榮譽にあずからなかったのは、たまたまタウ・セチが太陽側に見える位置にいて観測できなかったからだ。

ひとかたまりに見えた光点は、精密観測により三つの点の集まりだとわかった。三機だ！ 三機のビートルズが、けなげにもどうにかこうにか太陽系に戻ってきたのだ！ 残る一機がどうなったのかはあらたな未解決問題だけど、三機もいれば人類にはおつりが来る。光の青方偏移も、各機がほぼ正しいプロファイルでこちらに向かって減速しつつあることを示していた。

十数日後、深宇宙ネットワーク^Sが、ビートルズ自身が天測した位置情報と、バースト的に送信されてくるストレージデータをとらえはじめた。位置情報はいい。予想通りだ。問題は……そう、ストレージデータの中身だ。たちまち全人類が、上を下への大騒ぎとなった。きなくさい世界情勢も完全に吹っ飛んでしまった。アストロファージ問題がかすんで

見えるくらいの、コペルニクスの転回がそこには詰まっていたのだ。

人類には、隣人がいた。それも、たつたの十数年でいけるところに。

しかも、最初にかれらと友だちになったのは、われらがグレース先生なのだ。

そんなことって、ある？ 一三歳のぼくが知ったら、いったいどんな顔をするだろうか。

なんとも現実味のない話だけど、グレース先生は、タウ・セチで異星種属のエンジニアとばったり出会ってすっかり意気投合して、ついにアストロファージ問題を解決する方法を“かれ”と共同で見つけ出したらしい。ビートルズからは、先生が保存したありとあらゆるデータが次々に送られてきた。ビデオ・レター形式の経緯説明にはじまり、日々の日誌、エリディアンという驚異の隣人の動画、言語、文化、キセノナイトという驚異の物質の物性、加工方法、タウメーバという驚異の……オーケイ、この調子だとキリがないからやめよう。ともかく、科学史が数世紀分は進んでしまうくらいの“タウペディア”がそこにあつた。

そこから先は、報道されているとおりだ。

前もって全データを電波のかたちで受け取っていたばかりは、地球―月圏から充分離れたところで三機のビートルズに無人機をランデブーさせ、そつと捕獲した。タウメーバが人類にとって致死性の生物ではなさそうなのはデータからわかってたし、もはや惑星^{プラネタリー}検疫^{プロテクション}なんてあつてないようなものだけど、やっぱり地球に野放しにしたくはないからね。これは、科学というよりは、気持ちの問題だ。

オランダと韓国の企業がタウメーバ農場をさっそく大規模化した。日本の素材メーカーがニュージールランドのスタートアップと共同でキセノナイトの量産体制を整えた。エリディアン^{エリディアン}の存在は、既存の宗教や精神文化にけっこうな混乱をもたらしたけれど、まあ総体^{総体}でいえば人類はそれなりに新事実を受け入れつつある。

ストラット国際宇宙研究コンソーシアムの主導で、金星周回軌道に八基の播種船が投入された。昨年^{昨年}からペトロヴァ・ラインにタウメーバの制御播種を開始している。

いまのところ、効果は拔群だ――まるでシロアリ対策に駆除剤をまくみたいに、アストロファージの「巣」を直接たたくことで、金星から太陽に戻るアストロファージの数は激減した。太陽の光度も九七パーセントまで回復している。完全に元の明るさに戻るにはあ

と数年はかかりそうだけど、気の早い人類はもうお祭りムード一色だ。

タウ・セチでグレース先生が経験したことも、人類が得られた知見も、その後の展開も、まるでSF小説でも読んでいるみたいで、ぼくはいまだに信じられなくなるときがある。だけど、これはまぎれもない現実で——科学はこんなふうにあつというまに世界の見え方を変えてしまうんだ。もうぼくらは、前の世界にはもどれない。

* * *

「ドップラー効果って習ったじゃない？ 八年生のときだったかな」潮風に乗って、レジーナの声が聞こえた。

ぼくらはとりとめもない会話をつづけていた。夜の闇は深くなっている。潮の匂いも少し濃くなった気がする。いつのまにかアケルナルはヤシの木に隠れ、冬の大三角も西のほうに傾きつつあった。

「覚えてるよ。グレース先生、ぼくらを学校の外に連れ出して、パトカーのサイレンで実演してくれたんだったな」

あの授業を受けてから、怖かった夜中のダウンタウンの遠いサイレンがむしろ楽しくなったのを、ぼくは思い出した。

「ええ。サイレンが近づくときは音が高く聞こえ、遠ざかるときは低く聞こえる」

「そうだな。それが、どうしたんだ？」 ぼくは彼女の話の意図をつかみかねていた。

「ヘリー・ジエ」のことなんだけど」彼女は唐突に、ちがう話をはじめた。「ビートルズが帰ってきてからは、太陽系のペトロヴァ・ライン観測用に転用していたのよね。だけどもある日、ふと思いついたの。久しぶりにタウ・セチの方向に向けたら、もしかしてなにか変化が見えたりしないかしらって」

「さすがにタウ・セチのペトロヴァ・ラインは地球からは見えないんじゃないかな。星系全体が、一ピクセルに収まってしまいうだろうし」

「それはそのとおり。実際、タウ・セチはいつもとなにも変わらなかった。……だけど、タウ・セチから数秒角のところに、光点が写ったのよ。画像解析AIがようやく検出できるくらいの、かすかな光点が」

「光点？ ビートルズを観測していた頃にはなかったのか？」

「ええ、過去のデータをぜんぶ探してみたけれど、そんな光点はなかった。わたしたちが目を離していた数週間のすきに生まれたことになる」

「遠くの銀河の超新星という可能性は？」ぼくは、なんとなくわざとまぬけな質問をしてみた。

「ありえないわ」予想したとおり即座に否定されて、ぼくは反省した。「超新星のスペクトルなら、ペトロヴァ・スコープに写るわけがないもの」

太陽やタウ・セチといった恒星が出す光は、幅広い周波数を含んでいる。太陽光をプリズムや水滴に通すと七色の虹に分かれるのはそのためだ。だけどペトロヴァ光は特定の周波数成分しか持たない。プリズムに通せば、鋭いピークとしてあらわれる。だから簡単に見分けることができる。〈リー＝ジエ〉に搭載されたペトロヴァ・スコープは、特有の鋭いピークを持つペトロヴァ光だけを写すようにつくられていた。

「あの赤外スペクトルとエネルギー量は、自然現象ではありえない。あきらかに、大量のアストロファージをエネルギーに転換したときにのみ出る人工的な光よ」と彼女は力説した。「フル・スラスト時のアストロファージ・エンジンから出る赤外放射のエネルギー量は、太陽表面を凌駕するの」

「うへえ」とぼくは呟いた。「うっかり当たったら一瞬で蒸発しそうだ」

「たとえばヘイル・メアリー」の直径十数メートルのエンジンの光であっても、ペトロヴァ光に特化した光学フィルタと光電子増倍管を持つ〈リー＝ジエ〉なら、原理的には見

えるはずなのよ」

「一二光年先でも!？」

「ここ十年のペトロヴァ分光学の発展をご存じない？」

そうだった。あの頃の人類は生き残るために必死で、ペトロヴァ光マニアみたいになっていたんだ。そして、その先鋒にいたのが彼女なんだ。つ

「つまり、きみがいいたいのは……〈ヘイル・メアリー〉のエンジンの光が太陽系から見え

えたとってこと？」

「ええ」彼女はうなずいた。

「ワオ。だけど、エリディアン側の船のエンジンの光っていう可能性は？」

「それは考えた。だけどかすかな光度変化を見ると、きっかり三〇秒ジャストのサイクルで出力が制御されているように見えたの。人類とは異なる時間単位を持つ種属がつくったエンジンが、秒の単位で動いているとは思えない。あれはやっぱり人類がつくったものだ、とわたしは結論づけた」

「なるほど。だとしたらすごいじゃないか、レジーナ。なぜ公表しないんだ？」

ぼくはレジーナの優秀さに舌をまいた。ふと八年生の科学の授業を思い出した。実験中だけ盛り上がるほかの子どもたちとはちがって、彼女は実験後の雑多なデータを粘り強く

解析するのが得意だった。解析結果をことさらに自己主張しないところも、いまと変わらなかった。

「この話にはつづきがある」すごい発見をしたというのに、レジーナは淡々としていた。ぼくだったらすっかり浮かれてしまうのに。むしろ彼女はぼくの答えに少し失望しているようにも見えた。「じつは、いちばん最初の撮像では、光点は写らなかった」

「久しぶりすぎて、撮像設定をまちがえたとか？」

「ちがうの。最初は分光フィルタのバンドパス特性をペトロヴァ光よりも短波長側に設定していた。だけど、逆に長波長側に変えてみたら、光点が写った」

「え？ どういう意味だ？」

まだわからないの？ とでもいいかげな口調で、レジーナは答えた。

「――赤方偏移よ」

ああ、なんてことだ！ ぼくはばかだ。ほんとうにばかだ。

単純に、地球からタウ・セチ星系の〈ヘイル・メアリー〉が見えたなんてすごい、とか思ってたなかった。いつの、どんな状態の〈ヘイル・メアリー〉が見えていたのかなんて、

考えてもみなかった。

ドップラー効果の話は、まだ終わっていないかったんだ。

光源が遠ざかるときは、波長が長くなる。

〈ヘイル・メアリー〉はグレース先生を乗せて——地球から遠ざかっている。

ビートルズが帰還して半年後に発表されたそのニュースは、またたく間に世界を駆けめぐって全人類に衝撃を与えた。ぼくも報道で知った。でも、まさかその第一発見者がレジーナだったとは。

レジーナは人類ではじめて、見てしまったんだ。先生が遠ざかっていく決定的な証拠を。直接、その目で。

いったいどれほどのショックを、彼女は受けたのだろう。

「ああ……」気づかなかった恥ずかしさと、それを上回る衝撃に、思わずぼくは頭を抱えた。「きみだったのか。いちばん最初にあれに気づいたのは」

「ええ。偏移量は、エリダニ40に向けて加速する場合の計算値とぴったり一致したわ」彼女がいった。「例のテキストファイルを見つけたのは、そのあと」

レジーナがいているのは、“タウペディア”のなかでタイムスタンプがいちばん新しい、あるファイルのことだ。

ミススペルだらけのそのテキストファイルには、たったの数行、グレース先生が“友人”を助けるためにエリダニ40星系に向かうこと、地球には戻らないことにしたが心配しないでほしい、というようなことが、彼なりのいつものユーモアをもつて簡潔に記されていた。ぼくもいまだに、全文をそらでいえると思う。

「もしかして、それも、きみの発見だったのか」

「そう。必死で探したものだ。——赤方偏移のことがなかったら、いまでも気づいていなかったかもしれない。なにしろファイル名が“新規テキストドキュメント.txt”だったし」

「それはひどいな。ぼくでも見落とすよ」

「でも、それを読んで、わたしがどんなに狼狽したかわかる？　だって、ほかの動画や日誌では、これから地球に帰る、っていつてたのよ！」

彼女がこの大発見をなぜすぐに論文にしなかったのか、すこしわかった気がした。

きつと彼女は、みずからの手で最終判決を下したくなかったんだ。

自分の観測データの正当性は、彼女がいちばんよく知っているはずだ。だからこそ、そ

れが確実な証拠となつて疑念を決定的なものにしてしまうのが——自分が最大の貢献者となつてしまうのが、耐えられなかったのかもしれない。

「先生はいつてた。『ロッキー』から燃料を分けてもらえることになったんだ、つて。ビートルズを先に帰して、ちよつと遅れて追いかけるから待つててくれつて」

「レジーナ……」

「サンフランシスコの海と山と空と坂道が恋しいつて。帰つたらサリーズ・ダイナーのツーオーバーミディウムコンボに、奮発してパンケーキもつけるんだつて」

彼女は静かに感情を爆発させていた。

「授業、途中で抜けてきてしまったから、もう一度ちゃんとやらないとなつて。最後はとつておきのタウ・セチ早押しクイズをやるから、準備しておけよつて……！」

そうだ。ほんとうに、レジーナのいうとおりだ。

彼女だけじゃない。ぼくだつてそうなのだ。

グレース先生が地球に凱旋すると知つて、ぼくらがどれほど拍手喝采したことか！

退屈な中学校生活のなかで、いちばん楽しかったのがグレース先生の科学の授業だった。一三歳という多感な時期に、先生の授業とその後の先生をめぐる顛末を間近で見ていたば

くらの人生が、影響を受けないわけがない。先生は知らないだろうけど、あのクラスからSTEMの分野、とくにプロジェクト・ヘイル・メアリー関連に進んだやつは、ほんとうにたくさんいるんだ。赤外線天文学のレジーナと宇宙生物進化学のぼく以外にも、アストロファージ推進工学のトラン、温室効果制御のラリー、昏睡状態耐性マーカーのテレサ、自然酪農を復活させたアビー、ストラットのコンソーシアムを率いるハリソン……みんな、グレース先生の“遺志”を継いで、なんとか人類を立て直そうという一心で、それぞれの分野で必死に頑張ってきたんだ。

そんなかつての教え子に宛てられたあの特別なビデオ・レターは、人生最高のサプライズだった。先生が帰ってくる一六年後が、待ち遠しくてしかたがなかった。

だから、先生が地球から遠ざかってエリダニ40に向かっていると知ったとき、ぼくもほんとうにショックだった。ショックすぎて、滅菌したばかりのペットチップの箱をぜんぶひっくり返してラボでわんわん泣いた。

事情があったのはわかる。“タウペディア”のほかのファイル群はきちんと整頓され、インデックスまでついていて、グレース先生の用意周到さを物語っていたからだ。グレース先生はきつと、地球に向かうとする途中でエリディアンの友だちの危機を知ったんだろう。テキストファイルのタイムスタンプを見るかぎり、軌道力学的にいつて後戻りでき

るタイミングぎりぎりだったにちがいない。急いでメッセージを書いてビートルズのUS
Bに載せ、地球に向けて飛ばしてから、友だちを助けにいったんだろう。

先生のやったことは、正しい。圧倒的に正しい。

ぼくだったら、とっさにそんな判断ができるだろうか？ うじうじと悩んでいるあいだに、友だちを助けるチャンスもビートルズを放出するチャンスも失ってしまうんじゃないか？ そう、まるで、いまのぼくみたいに。

「だからなのよ。……だからわたしは志願したの。ラテラルパス・ミッションに」

レジーナの声ではつとわれに返る。なさけなく感傷にひたっていたぼくをよそに、彼女の声はもう、持ちまえの芯の強さを取り戻していた。

ラテラルパス。

タウ・セチに挑む一か八かのヘイル・メアリーではなく、“隣人”に向けてつなぐための、横向きのパス。エリダニ40に向けて何度でも投げて、ゲームをつづけていくためのパス。その第一便。ほんとうはもっと長くて堅苦しい名前のミッションだけど、ヘイル・メアリーにあやかっただけは勝手にそう呼んでいた。

彼女はひと息ついて、つづけた。「太陽光度が復活したという情報がエリダニに届くの

は、いまから一六年後。その頃にはたぶんグレース先生は、五十代になっているはず」

「高重力だし、さすがに身体にもガタが来ているだろうな」

「そうね。だから、もう戻ってくる気はないんだと思う」 星空をバックに、水平線のほうを眺めている彼女の横顔が、シルエットだけ見える。「もちろん太陽光度以外にも、いまの地球の状況をエリダニに向けて送信しつづけているけど、やっぱり一六年かかるし、エリドの濃く濁った大気の底に届くかどうかはわからない」

「逆もおなじだな。いまごろ〈ヘイル・メアリー〉の噴射光が見えているってことは、先生はまだ出発したばかりなんだ。仮に、エリダニに到着してから先生がこちらに情報を送ってくるにしても、さらに一六年後になる」

「だけど、わたしはいまから何十年なんて待てない。だから、グレース先生に直接会いに行く。先生が元気でいるうちに」

レジーナの声には、たしかな熱量があった。

「わたしが見つけたい美しい赤方偏移を、同じ速さで追いかけて打ち消してやるの。それがわたしのほんとうの志願理由」

たぶん、近いことを考えたやつらが世界中にたくさんいたんだと思う。ただし、彼女よ

りはもうちよつと実務的な理由で。

グレース先生と“ロッキー”の交流をデータから紐解くかぎり、エリディアンは人類とメンタリティが近いし、今後宇宙の友人としてうまくやっていけそうな気がする。しかし、往復三二年という距離はあまりにまだるっこしい。グレース先生が元氣なうちに人類が訪問して、国交？ いや、星交になるのかな？ ともかく仲良くなっておかないと、いろいろとまずい。その際には、グレース先生に通訳になつてもらう必要がある。もしも先生に万が一のことがあつて、向こうに誰も知り合いがない状態で訪問したとしたらどうだろう。……少なくともぼくは、先生なしにまったくうまくいく気がしない。

早く行動すればするほど、お手玉がもらえる——早押しクイズで学んだ、宇宙の普遍的真理だ。そして、先生に残された時間はかぎられている。ぼくらはエリディアンより寿命が短くて、せっかちで、衝動的な種属だ。

だから、いまから使節団を複数回に分けてエリドに送るのだ。それがぼくら人類の出した答えだった。そのための船のパーツの一部が、二週間後、この浜辺からはじめて打ち上げられる。八カ月かかる軌道上組立の最初の一步だ。

レジーナはみごと、第一便のメインクルーに選ばれた。ぼくはといえば、バックアップクルーだ。そして第一便が出発したら、すぐさま今度は第一便のバックアップクルーが第

二便のメインクルーになって、出発準備にかかる。太陽系とエリダニ40との位置関係から、出発のチャンスは年に一回。つまり、ぼくもレジーナの一年後には、彼女たちを追いかけていくことになる。

いまのぼくはもう、グレース先生のメッセージを見て大人げなく泣いたりしない。むしろ、先生の的確な判断と隣人愛を誇りに思っている。先生がエリドを訪れた最初の人類でよかったと、心から感じている。レジーナもおそらく、そうなんだと思う。

だけど、レジーナはきつと人一倍、この使節団にかける思いが強いのだ。彼女は赤方偏移の第一発見者だ。だからこそ、自分自身で物理的にそれを打ち消したいのだろうし、彼女にはその権利があつてしかるべきだ。

「ぼくもだいたいそんなところだ。いまが先生に会いにいく最後のチャンスだと思つてね」

すでにぼくらは、人生の折り返し地点にいる。船内時間は数年だけど、地球に残している家族や友人たちには三五年間の留守番を頼むことになる。もう会えないかもしれないが、覚悟のうえだ。

「もつともぼくは、レジーナのようなすごい成果はなにも出せていないけど」

ずっと水平線を見ながら話をしていた彼女が、こっちを向いたように感じた。いつのまにか、視覚に頼らなくても、彼女のようすがなんとなくわかるようになった気がする。

「いまさら、なにを謙遜してるの。いまや、あなたは世界の比較宇宙生物学を牽引している。タウメーバの第一人者でしょう。胸を張りなさい」

比較宇宙生物学は、生まれたばかりの新しい分野だ。人類はようやく、思弁的ではなく具体例をもって、地球生命とそれ以外の生命とを比較できるようになった。もつとも、ぼくらとエリディアンとタウ・セチの生命は、遠い昔に枝分かれした兄弟であるという説が、いまのところかなり有力ではあるけれど。

「オーケイ。ありがとう、レジーナ」とぼくは肩をすくめた。「まあ、ぼくの数少ない武器だしね。これがなくなったら、あとはマッケンチーズづくりくらいしかやれることがなくなってしまう」マッケンチーズは、ぼくがつくれる唯一の料理だ。

「あなた、なんだかグレース先生に似てきてるわよ」とレジーナが苦笑いした。

「ワオ。どのへんが!」まんざらでもない。先生はぼくのヒーローであり、憧れだったのだ。にやつきがおさえられない。「顔? ……じゃないよね」

「しゃべり方とか、ものの考え方とかね。タウメーバと毎日じゃれ合っているとこういう感じになるのかしら?」

「継代^{けいだい}のたびに、ぼくのかわいいタウメーバたちに声をかけているからね。オーケー、みんな、きょうは分裂してみよう！ いちばん早く増えたチームがお手玉獲得だ！ ってね」グレース先生の口調をまねてみる。……おっと、スベったかな。レジーナの表情はまったく見えない。だけど、ちよつと笑ったような気がする。

それにぼくが日々こんな感じでタウメーバを扱っているのは、ほんとうのことなんだ。先生の科学の授業で感じたワクワクに突き動かされて、ぼくはいま、ここにいるのだから。「——先生はずつと、ぼくの理想だった。かなり影響されてるのは否定できないな」

「じゃあ、あなたもきつと、よい教師になれるわね」

「そうかな」

「わたしたちは、グレース先生のことを直接覚えている最後の世代になろうとしてる。それを次の世代に伝えていくのも、わたしたちの仕事。先生の、ものの考え方も含めて、ね」

レジーナはそういうと、天文簿明が終わろうとしている東の空を黙って見すえた。大西洋と空の境界がうすぼんやりと白みを帯び、季節外れの春の星座は輝きを失いはじめていた。

しだいに優位になってきた視覚で、彼女の横顔をそっとうかがう。

おだやかな決意の色が浮かんでいるのが、もうはつきりとわかる。

まもなく、地球にいちばん近い恒星が、今日も水平線の向こうから昇ってくる。九七パーセントまで復活した光度で、この世界を満たそうとしている。

長かった夜が明けようとしているのだ。

ぼくらは、もう、大丈夫だ。

ふと、この感覚をいつか、ぼくらの“隣人”とも共有できたらいいな、とぼくは徹夜明けの頭でぼんやりと思った。

(了)